



信州と龍宮

小松 和彦

名古屋から松本方面に向かう特急に乗っていると、上松駅に近づいたとき、列車によって、日本の五大名峡の一つで、国の名勝地に指定されているという「寢覚の床」と呼ばれる景観説明のアナウンスがある。

大きく蛇行した木曾川の流れによって川の両側に形成された岩石群は、たしかに壮観である。だが、それに続く説明を初めて聞いたときは、さすがに驚いた。龍宮から戻って来た浦島太郎が老後をここで釣りをしながら過ごしたというのだ。

浦島太郎の物語は魅力的である。現代の日本人でも龍宮には格別の思いを抱いているのではなからうか。だが、信州は周囲が山に囲まれ海に接していない。そんな信州でも、海上遙か彼方の龍宮を訪問した浦島太郎譚に魅了され、太郎や龍宮との関係を持ちたかったのだろうか。

この伝説は沢庵和尚の『木曾路紀行』にも「浦島がつり石」なる記述があるというから、十七世紀にはすでにこの辺りでは語られていたらしい。誰が語り出したかはわからない。伝説とはそのようなものである。それでも、私は勝手に、浦島太郎の話を知る旅人が、寢床にもなるような滑らかな大岩を見て、おもしろ半分に創った太郎の後日譚が、いつしか地元に着したのではないかとさえ思っている。だとしても、木曾の山峡と老人の

浦島太郎の組み合わせは、あまりにも特異だと思わざるをえない。

龍宮への憧れを抱いた日本人は、龍宮を海上遙か彼方に見出すだけでなく、身近な水界、例えば、湖や池、沼、川などの奥底にも見出そうとした。そうすることで、海のない山間のムラでも龍宮訪問の話を楽しむことができるからである。その一つが各地に伝わる「龍宮童子」の昔話で、売れ残った薪や花を川に投げ入れたら、そのお礼をしたいと水界から現れた龍宮の使い（乙姫）に案内されて川底にある龍宮に赴き、龍宮の主から米や銭を無尽蔵にもたらす「童」を土産にもらって来る話である。この種の話で有名なのは、ムカデを退治したお礼に、瀬田川（滋賀県）に架かる橋下の川底にある龍宮に案内され、宝物をもらって来たという「俵藤太伝説」であろう。

ところが、信州にはこの種の龍宮訪問譚が見当たらないようなのだ。これは、信州には龍神・大蛇伝説が多いにもかかわらず、昔の人の間では龍宮への思いが希薄だったことを物語っているのではないだろうか。こうしたことをふまえると、信州における「寢覚の床」の特異さ・おもしろさが、いつそう際立ってくる。

（こまつ かずひこ）

国際日本文化研究センター名誉教授